

令和5年度 学力向上指導改善プラン

三田市立狭間中学校長 藤井 許善

学校教育目標		4月		2～3月			
推進主体		成果となる目標		年度末評価			
学力に関する前年度の状況・経年の課題等		学力向上に向けての重点的な目標		学力向上に向けての重点的な目標			
		〔指標となる数値等〕		〔成果目標達成のための具体的な手立等〕			
				〔今年度の成果と来年度に向けた課題等〕			
				評価			
学力 の 状 況	全国学力・学習状況調査結果の状況(国語、算数・数学に関する質問紙調査も含む)	国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話すこと・聞くことの領域全体でも、全国平均より高く、言葉を使うことに関して力があると考えられる。</li> <li>・国語は、書くことの領域で正答率が他の問いに比べて低く、問題文を深く読み取れていなかったり、問いへの答えを適切に記述できなかったりする課題が見られた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科等横断的な学習による論理的思考力の育成を図る。(道徳、数学、国語、理科、技術を中心に全教科、全領域で展開)</li> <li>・教科等横断的な学習による批判的思考力の育成を図る。(道徳、社会、家庭を中心に全教科、全領域で展開)</li> <li>・教科等横断的な学習による自己分析力の向上を図る。(道徳、英語、音楽、保健体育を中心に全教科、全領域で展開)</li> <li>・学校評価アンケートにおいて、生徒の学習状況を把握する。「授業がわかりやすい」に対して生徒、保護者の肯定的評価の回答が85%以上を目指す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉に関する興味・関心を高め、語彙を増やすことで言語活動の充実を図る。</li> <li>・資料をもとに論理的に書く、話す力を育成する。</li> <li>・タブレット・ICT機器を活用して他者に伝えるプレゼンテーション能力を高める。</li> <li>・課題を設定し、予想を立ててから実験したり、資料をもとに検証したりする探究的な学習を展開する。</li> <li>・根拠を明確にしながら、筋道を立てて問題を考える活動の充実を図る。</li> <li>・自己内対話をおして批判的な思考を高める活動の充実を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国学力・学習状況調査では、読むことの領域で文章の中心的部分と付加的な部分について欲求を基に捉え、要旨を把握することに関する設問では、正答率が高く、無解率が0.1%であった。読むことに主体的に取り組もうとする意欲が見られた。また、書くことについても、自分の考えが伝わる文章になるように根拠を明確にして書くことで無回答率が低い傾向であった。文章を書く機会を増やし、丁寧な添削の指導により、言葉に関心を持って文章にする力を高めることができた。</li> <li>・資料を読み取って情報を整理し、適切なものを選択することはまだ課題が見られた。</li> <li>・タブレットを活用する機会の検討により、ICTによる情報の収集、それをもとに自分の考えをまとめる学習を進めることができた。タブレットによる、プレゼンテーションも各教科で実施した。文化祭では、タブレットを活用してトライやる・ウィークの活動についての発表を行った。</li> </ul>	A
		算数・数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「データの活用」領域では、正答率が全国平均から上回っているが、身に付いている傾向が見られる。</li> <li>・道立方式の計算が全国平均より低い。道立方式の解き方が身に付いていない傾向が見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICTを活用した基礎学力の定着を図る。(ドリルパークの積極的活用)</li> <li>・「自らの学びの記録をもとに学習計画を立て、自らが学習方法を工夫する。」</li> <li>・学校評価アンケートにおいて、生徒の学習状況を把握する。「家庭学習の取組」に関する項目で生徒、保護者の肯定的評価の回答が70%以上を目指す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各教科で自主学習の方法を紹介し、生徒の学習意欲の向上を支援する。</li> <li>・木曜日の「がんばりタイム」を充実させ、基礎学力の向上に取り組み。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価の「基礎学力の定着に向けた取り組み」については、90.7%の生徒が肯定的な回答をしている。タブレットを活用した基礎学習を朝学習や長期休業、家庭学習の課題として取り入れるなどの工夫をしたことが成果を挙げつつある。</li> <li>・定期考査前日、落ち着いて学習に取り組むことができるよう、課題の提出の時期や内容、分量の調整を行うことで、学習に向かう機会を継続させることができている。</li> <li>・木曜日の「がんばりタイム」では、進んで参加する生徒も多く、1年間継続させることができた。</li> </ul>	A
		ICT機器を効果的に活用した取組状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各授業の板書を撮影し、全生徒に配信することで授業の復習をしやすくしている。また、書くことに時間がかかる生徒に対しても自分のペースで学習を進めるのに応じた学習が可能になっている。</li> <li>・ドリルパークを朝学習で積極的に活用しており、基礎・基本の定着を図ることができている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題解決的な活動、探究的な活動によって生徒自らの風土を高める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネットモラル授業、情報モラル講演会を実施し、危険性を理解することで自分で判断する力をつける必要性を学んだ。今の自分の状況を振り返り時間もとることができ、効果的であった。</li> <li>・校則の見直しに向けて、全校生へのアンケートを実施し、生徒が自分たちの要望と、社会に通じる校則の改正を行った。</li> <li>・生徒会活動をわかりやすく発信できるよう、プレゼンテーションも活用しながら工夫した。</li> <li>・生徒会が主幹となって、募金活動に取り組んだ。学校通信や生徒会通信でも発信した。</li> </ul>	B	
		定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価の「基礎学力の定着に向けた取り組み」については、90.7%の生徒が肯定的な回答をしている。生徒、保護者のニーズを捉え基礎学力の定着をさらに図る必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校園所連携の充実を図る(学びの連続性、生活習慣の定着)</li> <li>・地域の体験活動への積極的参加を促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当差別の会議を積極的に開催し、目指す子ども像の達成に向けた取り組みを繰り返し点検する。</li> <li>・個々の児童生徒の学力や課題を具体的に把握することで、小学校から中学校への接続が円滑にできるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国学力学習状況調査の、小中合同分析を行い、課題解決に向けての取り組みを中て共有することができた。自分の考えをまとめて書くために、メモやワークシートを活用したり、グループで伝え合う活動を経て作文にすることで、自分の考えをまとめて書く力をさらに向上させた。</li> <li>・生徒会と3年生の生徒が中心となり、小学校6年生に向けて中学校生活について紹介する出前授業を行った。また、中学校教員による小学校への出前授業も実施した。今後も校区で設定しためざす子ども像をもとに、小中一貫教育を計画的に推進したい。</li> </ul>	B
		授業等からうかがえる状況(各教科)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価「授業がわかりやすい」の項目では、生徒の88.6%が肯定的な評価をしているものの、昨年度より8%の減少となった。</li> <li>・タブレットを使って「主体的・対話的な学び」を実現するための授業に取り組む教員も増え始めている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の体験活動、講演会等による学ぶ動機付けの充実を図る</li> <li>・SNS等に係る生徒指導事業の割合を昨年度より低くする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒、保護者への情報モラルに係る講習や啓発を年間指導計画に基づき実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタルシブシブ授業では、情報モラルについて考え、生徒参加型の講演会を実施した。情報モラルから、人のかかわり方、自分の判断力について考える機会を持つことができた。</li> <li>・命の大切さを考える講演会で、他者を思いやる心だけでなく、自己肯定感を高め、学びに向かう意欲につなげることができた。</li> <li>・生徒会が主体となって、校則を改正することを実現した。生徒会主催で行事の企画、運営を行い、全校生で実施することができた。</li> </ul>	B
学力・生活向上に繋がる関係する学習習慣	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか」「難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか」の質問にたいして、肯定的な回答が、全国平均よりともに6%以上高い。昨年度より何度も、自ら学ぶとうとすることの大切を語ってきた成果だと考えられる。</li> <li>・「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか」「難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか」の質問にたいして、肯定的な回答が、全国平均よりともに6%以上高い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習のUD化、ICTを活用した学習支援を進める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修の機会やOJTをおとして、狭間中の学びの環境スタンダードを設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内容や板書を写真で記録したものを、個々のタブレットにアップロードして配信している。これにより、欠席者が後から学習内容を確認できることや、書くことに苦手を感じている生徒も、後から振り返ることができるようにした。</li> </ul>	A		
学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価アンケートの「教師は、生徒のことを良く理解し、通時・適切に指導している」「生徒の個性を大切にしたい」という回答の割合は80%を超えているが、保護者の肯定的割合が70%程度であることは課題である。教育相談や各種調査をもとに、生徒理解に努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育相談の充実(チューター制の導入)を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育相談アンケートによる詳細な分析から個々の生徒の特性を的確に把握し、生徒理解に努める機会を図る。</li> <li>・ハイパー・QU等のアンケート調査により、学級の状況を客観的に把握し、学級指導に役立てる。</li> <li>・4月に教育相談期間を設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学期で教育相談を実施し、個々の生徒に丁寧に向き合う時間を設けた。チューター制で、担任以外の教師とも相談することも実施した。新年度始めに教育相談を実施したことで、不安を早い段階で解消することができた。</li> </ul>	A		
校内研究の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・詳細の在り方についての研修や特別支援教育、生徒指導についての研修を実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒を支援する効果的な方法について理解し、教育実践にいかす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通級指導員より研修を受け、そのスキルを授業に反映させる。</li> <li>・ハイパー・QUを実施した後に講師を招いての研修会を行った指導改善に役立てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイパー・QU等のアンケート調査により、学級の状況を客観的に把握し、学級の課題にも目を向け、学年に関わる職員で共有した。引き続き、それぞれに必要な支援の目に向けて指導する。</li> <li>・性の多様性についての研修を行い、より広く生徒理解を深める機会となった。</li> </ul>	B		
校内研修の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通級生徒については、指導員との連携を図り、指導に生かした。</li> <li>・ハイパー・QUを実施した後に研修会を行って、生徒理解や対応に生かすことができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相談室の整備をさらに進めるとともに、多様な学びのスタイルに適應できる環境を整備する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SC,SSWや関係機関と連携し、学校生活に適應できない生徒や課題のある生徒へのケアに努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SCやSSWを活用して不登校対応や相談室利用の生徒への心のケアに努めた。学校生活への適応が難しい生徒の家庭訪問を定期的に行ってもらうことで学校と関係機関とをつなぐ役割を担ってもらい、学校、家庭、関係機関との連携を深めることができた。</li> <li>・ケース会議を通して今後の対応を協議する機会も設けた。</li> <li>・相談室を利用したい生徒のニーズに沿った、柔軟な利用を実施した。学習内容に合わせて、教室での学習と相談室での学習を併用したり、休み時間のみ相談室に戻る生徒の心のよりどころとなった。生徒自身で目標を設定して、学習に取り組んだ。</li> </ul>	A		
家庭連携の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学説明会開催時に小学6年生児童・保護者を対象にスマホの上手な使い方等について啓発した。</li> <li>・生徒会主体でスマホ利用の啓発動画を撮り、公開した。</li> </ul>						
小・中における教科連携等の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会が中心となり中学校生活に係る出前授業を実施した。また、中学校教員による小学校への出前授業も実施した。今後も校区で設定しためざす子ども像をもとに、小中一貫教育を計画的に推進したい。</li> </ul>						